

〔論文〕

対人援助における援助関係の研究 —現象学的「他者理解」—

宮田 康三*

— 目 次 —

はじめに

1. 問題提起—他者理解は可能か
2. 他者理解の条件
3. 援助関係の原理
4. 現象学的接近

おわりに

キーワード：他者理解、現象学的接近、利用者主体

はじめに

社会福祉、ソーシャルワークを取り巻く状況の変化はめまぐるしい。社会福祉の対象においても社会的排除や外国人などの検討、人権や自立についてのソーシャルワークの価値の問題など、その今日的課題は多いといえよう。ソーシャルワークの実践的研究法について論じる中で、佐藤豊道はソーシャルワークの固有性の功罪を見極めていく必要性を指摘し、「最大のソーシャルワークの受益者は誰かという視点でとらえてみる必要がある⁽¹⁾」であると述べており、それは「利用者」であることは言うまでも無い。さらに、サイエンスとアートを古くて新しい問題

* Kozo MIYATA 本学社会福祉学部教授（子ども福祉学科）

であるとし、「ソーシャルワーカーはその双方の視点を自己の思考様式の中に、実践様式の中にしっかり併せ持って日々の実践に入っていくことが必要になる」⁽²⁾つまり、今日重要とされる「利用者主体」「主体性尊重の中でのソーシャルワーカーと利用者の協働」といった価値を実践の中で具現化するためには、ソーシャルワーカーが「利用者という他者を理解する」ことやパートナーシップを発揮できるような援助関係を構築すると言うことはどのような意味を持つのかを研究することは有意義であると考え。

この論文の目的は、ソーシャルワークの実践において、利用者の自己理解のプロセスで、援助関係をよりよく進めていくにはどのように他者理解をしていけばよいのかを考察することにある。従ってここでは社会的側面からの考察がなされていないという批判はまぬがれないかもしれないが、ソーシャルワーカーも利用者も環境・状況の中の存在であり、両者の関係を「現象学的」に捉えることで、その本質的研究を試みるものである。

1. 問題提起－他者理解は可能か

自己が他者を理解し、逆に他者が自己を理解すること、即ち相互理解ははたしていかなる条件においてそれが可能であるのか。

横須賀俊司は「障害者とソーシャルワーカー」の関係について、ソーシャルワークを展開していく中で「協働関係」が必要であるが、両者には様々な格差が存在していると、その「非対称性」を指摘している⁽³⁾がこのことは利用者である場合に限ったことではないであろう。

セラピストが患者を、カウンセラーがカウンセリーを、ソーシャルワーカーが利用者を援助する際、その役割や機能について様々な議論があるであろうが、自己と他者の相互理解が原理的なものであることは否定できないであろう。「専門家と受益者の関係」を分析する理論、概念として古典的であるかもしれないが、心理療法におけるそれぞれの理論家の転移・逆転移の理論をたどりながら治療者－クライアントの相互作用が心理療法の場面において双方にどのような影響を及ぼすかを考察することを研究の手法とする。

本論を展開するに当たって、分析家・治療者・ソーシャルワーカー、あるいは

患者・クライアント・利用者という用語が混在している。それらをあえてそれぞれの領域での用語法として、そのままの文脈で統一せず使用した。それぞれの差異は論じられる必要があるであろうし、整合性の無い論理展開との批判があることは承知したうえで、「対人援助関係の原理」としての共通項を把握しようと試みたものであることを断っておく。

ジグムント・フロイト (Sigmund Freud) は過去の精神的経験のすべてが、分析家という人間との現実的な人間関係の中に再び活動しはじめると考えた。それは例えばクライアントが幼児期において父親や母親に対して自らが行ってきた関係をそのまま分析家にむけることであると説明された。そこでフロイトは、このようなクライアントの感情を心理療法の治療に利用したのであった。またフロイトはこの転移をクライアントの転移する感情が友好的か敵対的かで、前者を陽性転移、後者を陰性転移と名付けて、陽性転移は治療を促進し、抵抗を克服するものであるとした⁽⁴⁾。ただこの転移関係が分析家の人格や行動の影響を受けないようにするために、フロイトにおいては分析家の「隠れ身」が重視されることになった。

しかし、この「隠れ身」にもかかわらず、分析家の昇華されない退行的な本能的欲求がクライアントと面接することによりもたらせるという逆転移 (counter-transference) が起こることが確認され、「逆転移とは分析治療を妨害」するものと考えられ、その逆転移をさけるべく分析家においても彼自身が分析を受ける必要のあることを不可欠のものとした。これはフロイトの行った心理療法が「自然科学的方法論」のようにクライアントを外側から客体として捉えることを意味している。しかし、この逆転移の評価は、その後の理論家によって変化してゆき、分析家とクライアントの相互の新たな関係を生み出すことになる。このような評価の変遷はクライアントを人間の内部から捉えようとする試みであった。

次にタウバー (E. S. Tauber) とグリーン (M. R. Green) の場合を取り上げてみよう。タウバーとグリーンは基本的な方法として次の4つの事項を挙げている⁽⁸⁾。

- (1) 分析家とクライアントとで逆転移反応を探求することにより、クライアントの対人関係過程の性質についての新しい洞察が得られる。
- (2) 逆転移と普通いわれるものは、治療過程を害しない。

(3) 逆転移は、払い除けられ、無視され、まじめにとりあげられない時のみ損害を与える。

(4) 逆転移は、前論理的な様式のコミュニケーションによるクライアントとの間の適切な価値のある触れ合いである。

この前論理的なコミュニケーションということで、私が示唆を受けたのは、中村雄二郎の「ノンセンスとコモンセンス」という論文であった。⁽⁹⁾少し長くなるが、以下に引用してみる。

「私がとくに強調しておきたいのは、ことば（自然言語）の回復ということです。もう少しはっきり言うと、ものを考えるときにただ論理的に考えるのではなくて、ことば（自然言語）によって考えるということです。・・・中略・・・それは基礎的なところで私たちの思考を左右しないではおきません。ことば（自然言語）による思考は、少なからず重要な働きをします。それというのも、ことばはその含むイメージ性によって、おのずと自己を、身体性をも含んだ自己を関与させることになるからです。だからことばの回復ということにもなるからです」

との中村の言は、自然言語の人間相互関係における必要性を示すものであり、これはまさに自然言語がタウバーとグリーンの言う「前論理的な様式のコミュニケーション」の経験に重要な役割を果たすことを我々に自覚させずにはおかない。先の横須賀のいう「障害者とソーシャルワーカーの非対称性」の要因はここにもあるといえるのではないだろうか。論を戻すがこのようなタウバーとグリーンの見解は、フロイトの心理療法における「自然科学的方法論」的観点からの脱出をはかるものであり、逆転移を専門家の態度において積極的に評価することの中に、クライアントをその人間の内部から捉えようとする試みである。その意味では、ハリー・スタック・サリヴァン (H. S. Sullivan) の治療者は、「参加観察者」の態度が必要であるとした治療過程の理解と非常に調和するものである。⁽¹⁰⁾⁽¹¹⁾

アーウィン・シンガー (E. Singer) は、自己の見解の中で、①他人に関する全ての重要な洞察は、その人に対する自分の個人的反応の吟味によってもたらされるのは真実であり、②このような個人的反応の探求は、いつかは分析過程の核心となろうというコメントを加え、⁽¹²⁾タウバーとグリーン⁽¹³⁾の立場から次のような結論を援助者の態度に対して下している。

- (1) 逆転移の態度は、それが防衛的な、従って吟味されていない態度や反応を示す程度に応じて治療過程において有害である。
- (2) 治療者が患者に対して学びうる全ては、自己観察や、患者に対する治療者自身の態度や反応の吟味から生まれる。

以上述べてきたように逆転移の評価は、むしろネガティブなものからポジティブなものへ移ってきている。それは援助者がクライアントをただ客観的にとらえるのではなく、互いの主観と主観との交叉の中で治療の相互作用関係を積極的に捉えてゆこうとするものである。佐藤の言う「サイエンスとアートの双方の視点で利用者を捉える」ためにも有用であろうと思われる、このことについては、今少し立ち入った考察を必要とする。以下に、ユージン・ジェンドリン (E. T. Gendlin) のセラピストの「自己表明性」の概念を手がかりにして、逆転移の反映と一般的に呼ばれるセラピストの態度即ち、カール・ロジャース (C. R. Rogers) の「治療者の態度」について触れてみたい。

2. 他者理解の条件

ロジャースは「人格変化の必要にして充分な条件⁽¹⁴⁾」という論文で、建設的なパーソナリティ変化が起こるためには、次のような条件が必要であると述べている。⁽¹⁵⁾

- (1) 2人の人間が、心理的な接触 (Psychological contact) を持っていること。
- (2) 第一の人—この人をクライアントと名付ける—は、不一致 (incongruence) の状態にあり、傷つきやすい、あるいは不安の状態にあること。
- (3) 第二の人—この人をセラピストと呼ぶ—は、この関係の中で、一致しており (congruent)、統合されて (integrated) いること。
- (4) セラピストは、クライアントに対して、無条件の肯定的な配慮 (unconditional positive regard) を経験していること。
- (5) セラピストはクライアントの内部照合枠 (internal frame of reference) に感情移入的な理解 (empathic understanding) を経験しており、そしてこの経験をクライアントに伝達するように努めていること。
- (6) セラピストの感情移入的理解と無条件の肯定的配慮をクライアントに伝達

するということが、最低限に達成されること。

そしてロジャースはこれら6つの条件が存在し、ある期間継続するならば、他のどのような条件も必要ないと言い切っている。

さてこの6つの条件の中でジェンドリンは「治療者の表明性」⁽¹⁶⁾の箇所特に「共感 (empathy)」「無条件の配慮 (unconditional regard)」及び「一致 (congruence)」⁽¹⁷⁾がその中でも重要であることを示している。また、その中でも「一致」ということは「治療者が個人的あるいは職業的な人為性や策、姿勢などをすべて捨て、彼自身であることを指している」⁽¹⁸⁾と述べ、この条件は統合失調症患者の治療にますます重要になることを指摘する。さらにジェンドリンは、「治療者の表明性」についての3つの条件 (specification) を提起している。①押しつけにならないこと②治療者における2～3分の自己注目③すっきりした平明さ。この3つの条件による「治療者の自己表明」によって、ジェンドリンは、たとえクライアントが終始黙っていたり、つまらぬことを長々と話す時でも、相互作用を重要な、パーソナルな自己表明的なものにできると説く。⁽¹⁹⁾

ところで我々は、治療者の態度について、ロジャースが示した6つの条件、またジェンドリンが示した自己表明性についての3つの条件を見てきたわけであるが、この「セラピストの態度」をもっとつきつめていくと、中園康夫が論文で⁽²⁰⁾

「何故にセラピストは治療者としてこのクライアントの前に存在しているのか、ということが問題にならないであろうか。セラピストがクライアントの前にあるという『あるの意味』について決して自明なことではない」

と述べるような「人間の存在」という哲学的次元の問題が顕現してくる。セラピストがクライアントの前に存在して、クライアントと時間・空間を共にしているとき、今までのように両者の存在が自明のこととされている限り、その両者に生起する相互作用関係の本質は我々には見えてこない。このような認識はソーシャルワーカーが利用者の前にあるという点では同様の援助関係の原理として捉えて論じている。ではそれが見えてくるためには、どのような認識が必要なのであろうか。この認識についての考察は次の「3. 援助関係の原理」で行うつもりである。

3. 援助関係の原理

ここでは2. で行ったセラピストがクライアントに現前しているところの自明性についての問題提起から導かれる事柄として、両者の存在は如何なるレベルでそれが認識されなければならないのかを考察していく。そしてこの認識においてはじめて、両者の相互作用関係が明確になるはずである。かかる考察にあたって、アルフレッド・シュッツ (A. Schutz) における現象学的方法としての他者理解の仕方即ち、間主観性 (Intersubjektivität) の問題をその嚆矢としたい。

(1) 自明な存在としての他者

日常生活の世界は、シュッツによれば「私が仲間の人間として共有している世界、他者によって経験され解釈される世界、我々全てに共通な世界⁽²¹⁾」であり「はじめから間主観的な世界⁽²²⁾」である。現象学的心理学は、この間主観性の問題をさらに次の2つの問いに分けている⁽²³⁾。

- (a) 私の自我と基本的に同じエイドス (εἰδως)⁽²⁴⁾ 的な特徴をもつ自我としての「他我」はどのようにして私の意識の中で構成されるのか。
- (b) 他我との交わりの経験はどのようにして構成されるのか、あるいは、私が他者を「理解し」、他者が私を「理解する」という経験はどのようにして構成されるのか。

2. の部分で問題提起したように、セラピストがクライアントに現前していることの自明性即ち、他者の存在を単に自明なこととして問題にしない限り、この (a) (b) の間主観性の問題はあらわれてこない。しかしいったん、この両者の存在が自明なことではないという認識に立つとき、この間主観性の問題はセラピストとクライアントの相互作用関係に闡明なる像を結ぶ。なぜなら (a) のことは、セラピストの動機づけに係わり、(b) のことはまさに我々が1. 及び2. で考察してきた、転移・逆転移・セラピストの態度と深く関わってくるからである。

(2) 他者理解

シュッツによれば、「他者理解」について通常になされている考え方には様々なものがあり、曖昧さがつきまとっているという。例えば (i) 汝についての私の生きられた経験を指している場合、(ii) 汝の主観的経験がそこで問題とされている場合、(iii) そうした全ての経験をある意味関係に秩序づけること等が「他者理

解」と呼ばれるし、さらに他者の用いる記号の理解までをも含めると (iv) 記号そのものの理解 (v) その記号を用いることで他者が意味していること⁽²⁶⁾の理解 (vi) 他者がその記号を今、ここで、この特殊な関連において用いるという事実の意味の理解等である。

このような曖昧さを明確なものにするためにシュッツはまず「理解 (Verstehen)」とは何かということ⁽²⁶⁾を定義する。シュッツは「理解とは意味に相関するもの」⁽²⁶⁾だとし、次のように定義づける。

「この意味 (理解とは意味に相関するものという一筆者補足) では、自己の主観的経験を解釈する志向的作用はすべて理解作用 (verstehende Akte) と呼ぶことができ、またそうした自己解釈の基礎にある意味把握の基層もすべて『理解』と呼ぶことができる⁽²⁷⁾」

このように「自己の主観的経験を解釈する志向的作用はすべて理解作用」とする場合、先の逆転移やセラピストの態度はこの理解作用の範疇に入る。従って、フロイトの行ったセラピストがクライアントを客観的に把握しようとした「自然科学的方法論のように、患者を外側から客体」として捉える心理療法は、かかる意味での「他者理解」とは埒外のものであり、それは他者理解に無関心な傍観者の域にとどまってしまうことを意味している。

しかし、その後の理論家の逆転移・セラピストの態度の概念は、少なくとも次第にかかる他者理解に接近しようとしているのである。その意味では、特に先のロジャースやジェンドリンの心理療法には「他者理解」の為の現象学的接近への努力が窺える。

さて「他者理解」について、再びシュッツの見解に立ち戻る。シュッツはこの「他者理解」について、それは次のような段階をたどって明確化されると説明する。

第一段階「仲間の人間についての自己の生きられた経験の解釈」(このことは、私が汝についての自己の生きられた経験を解釈することによって見出すのは、私に相対している汝は仲間の人間であって映画のスクリーン上の影ではないという⁽²⁸⁾事実をいう)。

第二段階 自然的態度においては、我々は我々が他者の身体であると知っている外的対象に生じる変化を知覚する (つまり当の出来事、過程についての自己の

生きられた経験を解釈することによってこの変化を解釈すること⁽²⁹⁾。しかし、いまだに孤独な意識の領域を越えない。

第三段階 知覚された過程が他者の意識に属する生きられた経験とみなされる
ときはじめて、孤独な意識の領域は越え得る。

このシュッツの「他者理解」における各段階の説明は、ロジャースの先に挙げた第5の条件即ち「感情移入的理解 (empathic understanding)」の説明と良く照応する。ロジャースは次のように説明する。「クライアントの私的な世界をあたかも自分自身であるかのように感じとり、しかもこの『あたかも・・・のように』(as if) という性格を失わない、これが感情移入 (empathy)⁽³⁰⁾」であると。またさらに「彼 (セラピスト) がその (クライアント) 世界を自由に歩きまわる (moves about) とき、彼はクライアントのよくわかっているものを理解していることを伝えうるばかりではなく、クライアントの体験の中でほとんど意識されていないような意味をも、口に出して述べる⁽³¹⁾」こともできるとロジャースは説明している。

これらの説明はシュッツの「他者理解」概念を髣髴させるかのようであり、セラピストとクライアントの「世界—内—存在」⁽³²⁾を示すかのようである。また、このことは「セラピストがクライアント側のそれと同じであるという前提⁽³³⁾」ことの必要性をさすものである。

しかし、ここで注意を要するのは中園が論文で「ロジャースの言う『現象学的』という言葉は哲学における伝統的な『現象学』の理念とは同一の意味ではない」と述べている点である。確かに先に見てきたようにロジャースの心理療法の方法論は、シュッツの現象学的方法即ち間主観的に他者を理解することを髣髴させるものがあつた。しかしそれを「伝統的な『現象学』の理念とは同一の意味でない」とする中園の指摘は、次の問題意識に裏づけられたものである。

- (1) セラピストは、彼がセラピストになる為に学習し、習得して来た実証科学の諸概念及び対象把握の観点をどのように「正確な共感的感情移入」というあり方の中で解決するのか。
- (2) 日常の自然な生活習慣から生じた種々の態度をどのように解釈するのかという問題。

中園は、クライアントを理解することは、この2つの問題を「επιλογή」しな

ければ成立しえないが、ロジャースの場合の「共感的感情移入」は先の「無条件の配慮」と「一致」とをセラピスト信念としなければ行われ⁽³⁵⁾ないので、ロジャースの「*επιολή*」を通して得られる純粹意識*は、「無条件の配慮」と「一致」とを「感情移入」の為の信念としている点で、「現象学における『還元』ほど論理的に徹底⁽³⁶⁾」していないと指摘するのである。

(*ロジャースのいうところのセラピストの純粹性とはどういうことかについてここで触れておく必要がある。なぜなら現象学で捉えるところの「純粹」とロジャースの純粹とは明らかに本質的に異なるからである。ロジャースによればセラピストの「純粹性」は次のように捉えられている。

「彼(セラピスト)は、この関係のこの時間において、正確に自己自身であり、この瞬間において、このような基本的な意味で自己のありのまま(What he actually is)であるならばそれで十分なのである」(ロジャース・伊東博編訳『サイコセラピーの過程』ロジャース全集第4巻、岩崎学術出版社、1977年、124頁)。

ロジャースが述べるところのこの「自己のありのまま」、即ちそれは「彼が自己自身についてクライアントを欺いてはならない」(同、124頁)ということの意味しており、そしてセラピストのこのような態度こそがロジャースの重視する「関係におけるセラピストの純粹性」(同、123頁)の意味なのである。

かかる「論理的徹底」とはどのようなものであるのか、それを闡明するには、今少しシュッツの現象学的「他者理解」の概念を追ってゆく必要がある。

(3) 感情移入理論に対するシュッツの批判

シュッツの行っている批判はかなり厳しい。シュッツは感情移入理論の誤りを2つの点で指摘する⁽³⁷⁾。

- (a) 感情移入理論は、自分の意識における他我の構成を素朴に感情移入に求め、その結果、感情移入を他者についての知識の直接の根拠としてしまっている点。
- (b) 感情移入理論が、自己の心と他者の心の構造上の類似関係を指摘しているにすぎないにもかかわらず、他者の心についての知識であると僭称している点。

シュッツのこの2つの点での批判は、感情移入と間主観性において、その後者

が前者とまさに或る一点において凜として異なる点に貫かれたものである。その或る一点とは汝の経験も私の経験と同じ仕方(38)で構成されるということである。そのことをシュッツは次のことばで説明している。「われわれが他者の持続の流れの一般定立から出発するのに対して、感情移入からの『投影』理論は、感情移入という端的な事実から、盲目の信仰作用によって他者の心〔の存在〕への確信に飛躍するからである」。

(4) 対面状況－汝志向について

シュッツによれば、「対面状況」とは、「人々が互いに相手を直接的に経験しよう(39)のような状況」をいい、また直接経験とは「他者が私と空間及び時間を共有している(40)」ときに可能であるとする。さらに「他者が私と空間を共有している」とは、①他者が身体的に現前しており、私がそれに気づいているということ②私が彼を特定の個人として捉え、彼の身体を彼の内的意識の表現野とみなしているということ(41)を意味する。また「他者が私と時間を共有している」とは「我々が一緒に年を経ていること(42)」を意味する。そしてこの時間的空間的な直接性が、対面状況の本質となる。

さて、シュッツによれば対面状況の参加者には「汝志向 (Thou-orientation)」がなければならないとされ、その定義を「汝志向とは、自我が根本的の自己という様式において、他者の存在をとらえる作用の志向性(43)」とする。

しかしこの「汝志向」は日常生活では「純粹」なものではなく、多少とも「顕在化」し、「内容を確定された」ものだとシュッツは捉える。なぜなら我々が日常の生活において出会うのは、個人的特徴をもった現実的人間なのだ。従ってロジャースが心理療法の方法論において、セラピストの「感情移入的理解」を説く場合、(2)のところでも中園が問題点を指摘したように、現象学的な論理的厳密性が曖昧であるということも以上の考察により理解できよう。

4. 現象学的接近

我々は今まで、冒頭において述べた一貫したテーマ「他者理解」について、心理療法における「転移」「逆転移」及びそれにとまなう「セラピストの態度」について、諸理論家（フロイト、グリーン、シンガー、ロジャース、ジェンドリン）

の見解を手がかりに考察し、次にシュッツの理論に基いて、現象学的な接近法としての間主観性の問題に触れ、所謂「感情移入的理解」の批判を通じ、そこからさらに「汝志向 (Thou-orientation)」の問題まで達するに至った。

さてここまでの考察によって我々にひとつの問題が提起されて来る。即ち、心理療法において「他者理解」はどのレベルまで可能なものであるのかという問題である。

確かにロジャースは、第3の条件で治療関係においてセラピストは「一致した、純粋な統合された人間でなければならない⁽⁴⁴⁾」と述べた。しかし、この関係におけるセラピストの純粋性は、先の補足の箇所 (*印の所) で述べたように、現象学的還元⁽⁴⁵⁾によって到達する「厳密」なる純粋性とは本質的に異なるものである。ロジャースの純粋性は感情移入を行う為のひとつの条件 (信念といってもよい) であり、従って先に触れたシュッツの感情移入論についての2つの批判を受けなければならない部分があるようである。

しかしながら、心理療法の臨床即ち療法現場に、また治療の方法ということに関する限り、それは臨床実践の限界 (ポジティブな意味において) であろう。

また、このロジャースの「純粋性」は、「感情移入的理解」の為の条件のひとつであり、心理療法の臨床における固有性であって、他の領域 (例えば、この場合では哲学の領域であるが) との臨界点であろう。なぜなら、シュッツのいう「純粋性」は、厳密に現象学的還元を行って得られる「純粋意識」なのであり、シュッツの指摘するような、形式的な知的観念の産物であり、心理療法の臨床をもちや超越し、哲学的形而上学的認識のレベルになってしまうからである。

心理療法やカウンセリング及びソーシャルケースワーク等を行おうとする者が、この両者を混同するならば、おそらくその治療は治療者と患者との相互関係を非効果的なものにしてしまうであろう。

おわりに

「他者理解」について考察をすすめてきた。社会福祉の世界が「社会福祉基礎構造改革」や「福祉士法の改正」などめまぐるしい動きをするなか、日々、利用者を「現前」にしているソーシャルワーカーはまさに「実践」している。多くの

実践報告の中のひとつにおいて、新保祐光は「本人（利用者）とMSWとの協働（パートナーシップ）について分析して、『分らないけれどもわかれようとするMSWの利用者に対する無条件の関心とそれを現実ならしめる利用者との協働が不可欠なことをしめしている』⁽⁴⁶⁾」。

このような現場の苦悩はいつの時代もあるのかもしれない。しかし、あるべき「援助関係」という統体の中に「協働関係」や「利用者主体」「当事者主体」ということばにあるべき姿（Sollen）が象徴されているとすれば、我々は久保紘章の指摘する以下のような状況を打破すべき研究の歩みを止めてはならないであろう。

「当事者の時代、利用者主体、利用者の自己決定といった言葉が飛び交っているが、ソーシャルワークの思想として、また具体的な実践の場でそれがスキルとして定着するにはまだまだ時間が必要であろう。先進的な実践と旧態依然とした実践とが混在している状況は今なお続いているからである」⁽⁴⁷⁾。

このようなソーシャルワークの課題に対して、「ソーシャルワークの思想」と「実践的スキル」を繋ぐべく努力として「援助関係とは何か」を問い、「他者理解」の原理を「現象学的接近」という方法はあるべき姿を具現化（Sein）するソーシャルワークのひとつの方向づけとなろう。

引用文献

- (1) 佐藤豊道（2006）「ソーシャルワークの実践的研究法」『社会福祉実践理論研究』15 58頁
- (2) 1) 前掲論文 59頁
- (3) 横須賀俊司（2003）「障害者運動から見るソーシャルワーカー」『ソーシャルワーク研究』112 相川書房 6頁
- (4) 実際、メルロ＝ポンティは（1980）「精神分析と現象学」（滝浦・木田訳『言語と自然』所収、みすず書房 181－192頁）によって両者の共通基盤を見出そうとしているし、またP.ローマスは（1980）「精神療法への実存的－現象学的接近」（鈴木二郎訳『愛と真実－現象学的精神療法への道』所収、法政大学出版局 80－105頁）で現象学的精神療法を積極的に展開させている。その他ピンズワングー、ロジャースなど多くの人々が試みている。
- (5) 佐治・水島編（1977）『心理療法の基礎知識』有斐閣 18頁
- (6) E. Singer. (1976) 鐘、一丸訳編『心理療法の鍵概念』誠信書房 275－276頁

- (7) 6) 前掲書 317頁
- (8) 6) 前掲書 325-326頁
- (9) 中村雄二郎 (1980) 「ノンセンスとコモンセンス」『思想』1月号
- (10) 6) 前掲書 326頁
- (11) 6) 前掲書 326頁
- (12) 6) 前掲書 326頁
- (13) 6) 前掲書 338頁
- (14) C. R. Rogers. (1977) 伊東博編『サイコセラピの過程』ロジャーズ全集第4巻 岩崎
学術出版社 119-120頁
- (15) 14) 前掲書 119-120頁
- (16) E. T. Gendlin. (1976) 村瀬孝雄訳『体験過程と心理療法』牧書店 193頁
- (17) 中園康夫 (1971) 「心理療法の基本的原理についての若干の考察-特にC.ロジャーズ理論に
おける“態度”の問題と現象学的接近の問題を中心にして-」四国学院『論集』3号 6頁
- (18) 16) 前掲書 193頁
- (19) 16) 前掲書 199頁
- (20) 17) 前掲論文 9頁
- (21) A. Schutz. (1980) 森川、浜訳『現象学的社会学』紀伊國屋書店 147頁
- (22) 21) 前掲書 147頁
- (23) 21) 前掲書 362頁
- (24) 21) 前掲書 362頁 このエイドスとは、知覚可能な対象の移ろいやすい経験的特徴に対し
て、その「本質的」すなわち普遍的特性をいう。エイドスは、知覚対象や思惟対象が構成され
る意味領域に属する(同360頁)。
- (25) 21) 前掲書 154頁
- (26) 21) 前掲書 154頁
- (27) 21) 前掲書 154-155頁
- (28) 21) 前掲書 154-155頁
- (29) 21) 前掲書 155頁
- (30) 14) 前掲書 127頁
- (31) 14) 前掲書 127頁
- (32) M. Heidegger. (1977) 『存在と時間』桑木務訳 岩波文庫 上巻 104-105頁 ハイデガー

によれば、世界-内-存在という表現によって示された現象的な実状は①「世界において」ということ ②常に世界-内-存在という仕方によって存在するもの ③内-存在そのものという三重の視点を与えている。

(33) 17) 前掲論文 11頁

(34) 17) 前掲論文 12頁

(35) 17) 前掲論文 12頁

(36) 17) 前掲論文 12頁

(37) 21) 前掲書 165頁 シュッツはこの批判のすぐ後で次のようにも述べている。「観察者が同時性において、誰かを直接的に見ているときには、事情はこれ（事後解釈）とは異なる。その時には、生き生きとした志向性が観察者を運んでおり、そこでは観察者は、自己の過去の経験や想像上の経験を一步一步再生する必要はない。他者の行為は、目の前で一步一步繰り広げられており、そうした状況では、所与としての行為の目標から出発し、次にそれに伴っていたはずの生きられた経験の再構成に進むという仕方では、観察者と被観察者の同一化が行われるのではない」（同165-166頁）。

(38) 21) 前掲書 164頁

(39) 21) 前掲書 175頁

(40) 21) 前掲書 175頁

(41) 21) 前掲書 176頁

(42) 21) 前掲書 176頁

(43) 21) 前掲書 177頁

(44) 14) 前掲書 123頁

(45) E. Husserl. (1977) 立松弘孝訳「現象学の理念」みすず書房 67頁

(46) 新保祐光 (2008) 「ソーシャルワーク実践の根拠としての『状況的価値』」『ソーシャルワーク研究』132 相川書房 61頁

(47) 久保紘章 (2003) 「利用者からみたソーシャルワーカー」『ソーシャルワーク研究』112 相川書房 1頁